

平成 2 年度

## 幼児理解について考える

～ありのままの子どもの姿に近づくために～

川崎市総合教育センター 幼児教育長期研修員

## 幼児理解について考える

—ありのままの子どもの姿に近づくために—

上 田 純 子<sup>1</sup>

キーワード：幼児教育 幼児理解 実態把握 相互理解 遊戯治療

### はじめに

私たち保育者は一人一人をよく理解しかかわっていくという考えに基づいて、子どもたちを保育している。その意味を再確認する為にも、幼児を理解することについて考えていきたいと思う。私の所属園では、平成元年度2学期から、保育形態を次のように切り替えた。〈一斉指導による活動の後に、自由な活動を〉という形から、〈登園時から自由な活動を〉行う形への変更である。子どもにまかされる時間が増えるという体験過程の中で、子どもの実態のとらえ方があいまいだったのではないかと、という疑問が生じてきた。これが、本研究の主題を設定する動機づけとなった。

### I 研究のねらい

1. “実態をとらえる”ということについて考える。
2. 事例を通して、子どもを理解することについて考える。

### II 研究の内容

1. “実態をとらえる”ということについて考える。

#### (1) 実態把握とは

私たちは子どもの実態をどの様に把握しているのだろうか。保育者の働きかけが直接影響を及ぼす場面と、影響が及ばない場面に分けて表に整理してみた。

表1 実態把握ができる場面

A	保育者の働きかけが影響を及ぼす中で手がかりを得る場面  ・一緒に遊ぶとき ・トラブルが起きて対応する時 ・集団指導の場 —— 集団の一人として皆と行動を共にして欲しいという気持ち保育者側に出てくるのでAに分類
B	保育者の働きかけが影響を及ぼさないで手がかりを得る場面  ・家庭から ・担任以外の保育者から ・周囲の子どもから ・遊んでいる時の行動観察から —— 次の行動がこんな風に展開するとよいのだがと思う気持ちが生じることが少なくなるか、生じてても直接的に働きかける立場になっていないのでBに分類 ・ビデオカメラによる記録

#### ・実態把握ができる場面について

担任が主観的にとらえた事柄がA場面より得られる。B場面から得た手がかりは、担任の影響が及んでいないという点でAよりも客観性のある子どもに関する事実である。しかしB場面から得る手がかりは、一見客観性がある様に見えるが、見る者の意識を通して感じとられた事柄である。客観的な事実だと思っていた事柄は、主観的にとらえられた事柄であることがわかった。本研究ではA場面にしぼり、主観的に見えていることについて考えていきたい。

<sup>1</sup>川崎市立南百合丘小学校付属幼稚園教諭（幼児教育長期研修員）

## (2) 主観的に見えていることについて

鯨岡峻氏は、次のように述べている。「私はいろいろなものを見、聞き、感じるわけですが、それは（中略）自明な常識や価値観との絡みの中で起こってきているはずで、そのような常識や価値観が駄目だというのではなく、それらを明らかにすることによって、今このように見えているのは、それらとの関連においてなのだということを確認したいわけです。」<sup>1)</sup>

私との単なる関係の善し悪しで、その子への否定的な見方や、「良い子」という様な固定的な見方をしたり、〈5歳児の発達レベル〉に照らし合わせて判断したりすることがある。前者は感覚的なとらえ方で、個人の主観で左右される部分が大きいと考えられる。後者は客観的視点からとらえようとする見方で、定めた基準枠を使って、状態を説明する限りにおいて正確な見方である。しかし、そのとらえ方は、一面的で一面的とも言えるものである。何故ならば、見る側がとらえた状態は、見られる側からすると、必ずしも理解された状態とは言えないからである。

## (3) 一面的でない見方とはどういうことなのだろうか

子どもが、自分の価値枠内で理解できない行動をとったとき、私は理解し難いと感じたり気になったりする。しかし背景にある状況や気持ちがつかめると相手を受け入れることができ、相手も受け入れられた状態になり、二者間の関係は良いものになる。相手を受け入れられない時、二者間の関係は、滞ったものになる。この時二者間が肯定的な関係に変化していけるよう、見る側が自分の価値枠を見つめることが必要になる。自分の価値基準はどこにあるのか、価値枠を広げると相手はどの様に見えてくるのか — 見る側がこの様な過程をふむ時、見られる側は〈受け入れられなかった状態〉から〈受け入れられた状態〉へと、見る側の変化に伴い、相互的に変化していく。この変化の過程の中で、二者間の関係が深まっていく。良い関係を相互的に生み出していけるよう見る側が相手をとらえ直すという、連続的な動きを作りだすことが理解することである。大石益男氏は、次のように述べている。「保育所の生活に慣れ、楽しく遊べない子ども達に会おうと『何故この子は私達と楽しめないのだろうか』という視点で子どもを見ようとしてきた。そして、その結果として社会性などとも呼ばれる人づきあいのスキルを教えようとしてきた。（中略）問題はコミュニケーションがうまくいかないという関係の問題であるのに、その解決を子どもの行動変容にすり替えようとする傾向である。（中略）育てるべきは『共につきあえる』という関係であり、それが結果として、子どもは人とつきあうことの楽しさを感じていくことになる。」<sup>2)</sup>

## 2. 事例を通して、子どもを理解することについて考える

### (1) 研究の方法

- ・子どもとのやりとりの場面における、自分の心情の変化を追う

### (2) 事例研究

#### ①事例1. S子さんとのかかわりから（遊戯治療場面から）

- ・S子さんについて — （主訴）行きしぶり （学年）中学一年 （障害）ダウン症

---

1) 鯨岡 峻「教育と医学12月号」「子ども理解と子ども — 大人の間主観的關係」1989年

2) 大石益男「国立特殊教育総合研究所紀要」「保育所における一ダウン症児のコミュニケーションの変遷について」1989年

表2 3回目のプレイ場面でのS子とのかかわり(平成2年7月\*日)

S子の様子とS子とのかかわり	私の心情の変化	自分の心情についての分析
① ロビーで会った、嬉しそうなお表情で私の方へ近づいて来てくれた。カセットテープを持って行きたいらしく「テープ」と母親にせがんでいる。母親は「あれは、こわれたの」と説明するのだが、S子は母親がカセットテープを手渡ししてくれないので足踏みして怒っている。	① 親子げんかになってしまいそうだったので、自分として、どう動いたらよいかかわからず、待っていたように判断する。母親の説明は通じないんだなあ、と思う。	①では、S子は自分の思い通りにならないので、母親に腹をたてているのだが、私はそれを「説明が通じていない」と受けとめている。①' ロビーでの出会いをプレイの始まりとするならば 私はすでにスタートから、S子の気持ちではなく、母親の立場に立って二人のやりとりを目を向けているようだ。
② 何のきっかけがあったのかわからないが、S子はカセットテープを持って行くことは、あきらめた様子で、私の方へむきを変えたと手を握って並んで歩き始めた。	② 気持ちが、きりかえられてよかったと思う。もうニコニコしていて、がっかりした様子でもない。	②では、S子が特別がっかりした様子ではなかったので、つい先程までS子が、カセットテープを持っていきたくてたまらなかったのだということ、私はすっかり忘れていた。「テープは、こわれてしまったの」と、母親がS子に言ったのを聞いていた私は、「こわれたのなら仕方ない。今日は聴けない」という判断を、自分でも無意識に行っていたと思う。
③ 3Pへ入るとS子は、カセットテープレコーダーをすぐに床に下ろし、3Pにあるカセットを次々に入れて聴き続ける。聴くと音も、曲の初めの部分か聞かえると、カセットを入れ換えるといふことの繰り返しで20分くらい経過した。「アッコちゃんのカセットはないね」と私は話しかけた	③ カセットに、まだこだわっているなあ、と思う。 何故、曲を全部聴かないんだろうと思う。	③では、「カセットテープにこだわっている」と感じている。「テープはこわれたから今日は聴けない」という事柄は、私の気持ちの中では整理できることだ。しかし、S子は、私と同じ様に、納得できる形で気持ちか切りかえられたのだろうか。「カセットはないんだから、聴しても仕方ないんだよ」という、私の一方的な判断を基準にしていると、S子の姿は、いつまでもカセットにこだわっているS子として目につく感じられる。いつものテープが聴きたくなったS子、聴きたいのになくて我慢しまわっているS子、というとらえ方ができなくなっていると言える。

・事例1における自分の状態は次の様に整理できる。

- (ア) S子のやりたい行動をとりあえず受けとめようとしている状態。
- (イ) 目に見えるS子の行動を状態として捉えている。(例) ②' ③' ⑤' 下線部分
- (ウ) S子の行動にまず反応し葛藤を起こし、その結果として困惑している自分の方に目が向き、S子の気持ちに関心が向かない状態。(例) ⑧' ⑩' 下線部分
- (エ) S子の表面的な行動に目が奪われたまま、状況判断している状態。S子にとって、その場の状況がどの様に理解されていたのか、という視点に立っていない。(例) ②③' 下線部分  
私が以上の様な状態だった為、S子を受けとめられず、行動の意味(「テープを聴きたかった」という気持ちを整理していった)にも気付くことができなかったと考えられる。

②事例2 D夫君とのかかわりから(保育活動場面)

表3 D夫とのかかわり

D夫とのかかわり	自分の心情の変化と、その分析
そんなある日、D夫はホールで椅子をかたづけしていたHさんを、いきなり後ろから足で蹴った。 ①T:「D夫君!何やっているの!なんでHさんを蹴ったりするの?」 私は怖い顔でD夫を見つめた。日曜無口だったHさんが、やっとう元気を出し始めた所なのに、と私は腹立たしくなる。D夫は、ばつもの悪そうな顔をして口をへんの字に曲げていた。 ②D:「だって……………Hが男づけないから……………」 ③T:「Hさんは椅子を今運んでいる所だったのよ。片づけていたのよ。どうして足で蹴ったりするのD夫君?」 ④D:「足で蹴ってない、手だもん。」	①D夫の行動は、Hさんが対象だったということもあって、私には耐えがたいものだった。D夫は私に強い口調で問い詰められ、弁解するしかなかったのだろう。しかし私には、ハッとしていたに違いないD夫の気持ちか、見えなくなっている。 ②~④私はD夫の答えを、言葉通りにとらえようとする。D夫がHさんを蹴ってしまったのも止む得ないと考えられる様な理由であれば、この時点で私はD夫の気持ちに近づくこともできたと考えられる。しかし、D夫の答えは、私が快感したり納得したりできるものではない。私は、「なんで悪いってことかわからないのだろう」と、足で蹴ったことを認めたがらないD夫に、腹を立てている。
⑤この日私にはD夫とうまくかわれなかった、という後味の悪い気持ちが残った。 ⑥2~3日後、D夫の母親が私に話しかけてきた。 母:「先生、昨日D夫とやら、弟のことを蹴ったんです。でもね「どうして僕は蹴っちゃうんだらう」って言っているんですよ。少しは気にしているみたいなんです。」 ⑦T:「エッ、そんな事をD夫君言っているんですか?そうですか、D夫君、気にしているんですね。でも、どうしてなんだらうと、考えられるって事はすごいことなんじゃないですか。」この様に答えたものの、「どうしてなんだらう」と自問自答しているD夫の事が、頭から離れなくなった。感情的に怒った事が思い出され悔やまれた。	⑥母親の話を聞いた時、即座に⑤の様に答えた。「気にしている」ということは、D夫にとって成長なのではないかと考えたからだ。後味の悪いものか残ったが、あれでよかったと納得しようとしている心の動きである。この後、次の様な動きが私の中に起きる。「どうして僕は蹴ってしまうんだらう」とD夫が悩んでいることを知り、あの日黙ったままだったD夫の気持ちか手にとる様にわかり、自分の働きかけに不甲斐なさを感じていく心の動きである。

・事例2における自分の状態は次の様に整理できる。

- (ア) 怒っているD夫、という感じ方は瞬間的に消え、蹴った行為だけしかとらえていない。
- (イ) D夫の行動を改善することに関心が向く。⑦⑧⑨
- (ウ) D夫の行動に大きく動揺して、蹴った理由を知る為のかかわりが始まっている。①③
- (エ) 理由を知ろうとすることに、私の関心が向いている。これは、D夫の行動を納得のいく形で

受け入れたいために起きる動きである。①③

(オ) D夫が、大声で叱られた瞬間に置かれた状況に、私の気持ちが向いていない。①

### (3) 考察

表4 事例1・2の類似点

#### ①事例1・2の類似点—

事例1・2は表4の様に整理できる。事例2は保育場面でありプレイ場面とは異なる。しかし、受容的な態度が失われる心の動きが、この様な状況の中で起きているということが確認できた。

事例1(イ)と事例2(ア)	—相手の行動を、視覚的に感じとった動きとして捉えている点。
事例1(ウ)と事例2(ウ)	—相手の行動を見て、大きな葛藤や動揺が起きている点。
事例1(ウ)と事例2(エ)	—事例1(ウ)は、困惑している自分に、事例2(エ)は、既に起きてしまった過去の行動の理由を知ること、私の関心が向いている。その結果、今、目の前にいる子どもの気持ちに関心が向いていない。
事例1(エ)と事例2(オ)	—相手の置かれている状況に気持ちが向いていない。

②相互的理解という視点から —完全に相手の立場に立って、相手をとらえることはできない。しかし「伝わりあっていない」と気づき、自分の価値枠を見つめ始めた時に、見る側の自分は変化し始めている。つまり行動にとらわれて葛藤や動揺を起こすだけでなく、行動の意味を感じとろうとする内的な動きが始まるのだ。その強い関心が向かう時、相手を捉え直すきっかけと出会うのだと言える。見る側が相手をとらえ直す、その動きが理解の始まりであることが、事例の中から言えるのではないだろうか。

#### (4) まとめと今後の課題

相手を理解したいという気持ちは私たちに共通のものである。しかし、その気持ちがどんなに強くても、いかに一方的な理解に陥り易いかということは、教育にかかわる私たち皆の問題ではないかと思う。今後は、相互的理解と指導援助の関係について、保育実践の中で考えていきたい。

## おわりに

教育相談と障害児教育に携わっている方々から学ぶことの多い一年であった。また、南百合丘小学校付属幼稚園の先生方のご協力を得て、8ミリで保育を記録する機会も頂いた。研究の中でそのことに触れることはできなかったが貴重な体験であった。総合教育センターの多くの先生方ならびに幼稚園の先生方に、心よりお礼申し上げます。

#### ・引用文献

鯨岡 峻 「教育と医学12月号」「子ども理解と子ども—大人の間主観的關係」1989年

大石益男 「国立特殊教育総合研究所紀要」「保育所における—ダウン症児のコミュニケーションの変遷について」1989年

#### ・参考文献

津守 真「子ども学のはじまり」フレーベル館

津守 真「発達の見方—人間科学の観点」教育と医学12月号 1987年

大石益男「保育者のまなざしと子どもの生活世界」教育と医学12月号 1988年 他

#### ・指導助言者

横浜国立大学助教授(専門員) 岡田 守弘

川崎市総合教育センター指導主事 大河原美春

川崎市総合教育センター指導主事 片山世紀雄